授業力をみがく

英語編

つながり 接続を重視した指導と評価の在り方

～学びに向かう力を育成するために～

PROFILE

片山 敬子 かたやま けいこ（鳥取大学 教員養成センター 特任教授）

1957年、鳥取県生まれ。関西外国語大学 英米語学科卒業。鳥取市立小学校教諭、中学校教諭を経て、鳥取県教育委員会で指導主事、管理主事、学事係長、教育センター研修企画課長、小中学校課 義務教育主査として11年間勤務。鳥取市立瑞穂小学校、鳥取市立湖南学園（小中一貫校、2018年度より義務教育学校）で校長。2018年4月より現職。

1 学習指導要領の改訂と「指導と評価の一体化」

新学習指導要領が小学校では令和2年度より、中学校では令和3年度より全面実施となり、高校では令和4年度より年次進行で実施されます。外国語科については、小学校3・4年で「外国語活動」という助走を経て、小学校5年から4技能5領域の「外国語科」が導入され、中学校3年間、高校3年間、小中高を通して8年間の「外国語科」の目標及び内容が提示されました。

学習指導要領が改定されるたびに、「指導と評価の一体化」が話題になります。なぜなら、指導の目標や内容が変われば、それに伴い指導方法や評価の在り方も変化していくからです。そういう意味で学習指導と学習評価は表裏一体とも言えます。学習指導要領に基づき編成された教育課程をもとに指導計画が立案され、実際に授業を行い、児童生徒の学習状況を評価することで、指導改善や学習改善に役立て、さらには教育課程の改善を図ることで、教育活動の質の向上につなげるという一連のマネジメントが働きます。外国語科については、単元目標に対して、その達成状況をどのように評価していくのか具体的な評価設計が必要であると考えます。誰が評価し、どのような評価方法を用いるのか、そしてその評価結果をどう活かすのか、見通しを持つことが求められます。本県ではコロナ禍の中で、前倒しとなった国のGIGAスクール構想の活用により学習用ツールが導入されることになりました。小学生から高校生まで個別の学習履歴が蓄積されるということで、自己の学習状況を自ら把握し、学習への取組や進め方を調整していくなど、学ぶ意欲の醸成に期待をしています。

2 「主体的に学習に取り組む態度」の指導と評価について

今回の改定を受け、観点別学習状況の評価は「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理・統合されました。中でも私が最も注

目したのは「主体的に学習に取り組む態度」という観点でした。他の2観点とも密接な関係にありますが、性格や行動面の傾向評価ではなく、自らの学習状況を把握し、学びを調整していくという意思的な側面を、「～しようとしている」という状況で評価していきます。生涯にわたり学習する基盤を培うために養う資質・能力としてとても重要な観点です。

私はこの観点を重視するのであれば、教員は小中高を貫く「外国語科」の学びの全体像を把握しておく必要があると考えます。校種を越えた接続という捉え方をするならば、中学校では小学校段階での外国語活動を経た2年間の外国語学習で身に付けた力を基盤として、中学校3年間の学びの接続を考えていかなければなりません。また高校では中学校段階までの学びの蓄積を前提として、各学校の教育課程に応じた確かな資質・能力を育成していくことになります。さらに小学校では中学校段階での指導内容を、中学校では高校段階での指導内容を念頭に置きながら、発展や応用につながる指導の充実を図っていくことも学びに向かう力の育成には必要です。

このように、8年間の「外国語科」について学校段階を越えて、学びの連続性・系統性を重視し、接続を円滑なものにし、児童生徒にとって「主体的に学習に取り組む態度」を発展的に育成していくことが重要なポイントとなります。つまり、日々の授業における児童生徒の学習状況一コマ一コマを丁寧に見取り、ねらいの達成度を評価していく地道な作業を積み重ね、単元を通して目標への定着度を確認していくのと同時に、外国語科全体を俯瞰し、計画的・意図的に系統性を活かしながら指導内容を柔軟にデザインし、評価していくことが重要な意味を持ちます。評価のための評価に陥ることなく、児童生徒が主体的に学ぼうとする姿勢を育て、状況を的確に見取りながら意欲の喚起につなげ、粘り強く学びに向かう態度を培っていきたいものです。

3 魅力ある言語活動へ

そのためには、日々の授業の中で、児童生徒の発達段階に合わせて言語活動を工夫・改善していくことも一つの方法です。「外国語活動」では、「聞く」・「話す」活動を中心に、児童は“Good Job!”などの評価言に目を輝かせながら、学ぶことの楽しさや達成感を得たり、外国語に対する興味を深めたりしていきます。そして、「外国語科」になると「読む」・「書く」が加わることで、表現の幅が広がり、4技能の学び方をどう効果的に組み込んでいくかということになります。聞いたり、読んだりしたことに基づいて、話したり、書いたりする活動を取り入れるなど、統合型の言語活動を開発することにより、児童の興味関心をさらに高め、学ぶ意欲の向上につなげていくことも考えられます。

また中学校では、すでに「外国語科」がスタートしている状態で生徒の学びが始まります。小学校での学びを土台とし、発達段階を考慮しながら発信力の向上を目指した言語活動を授業に組み入れるなど、つながりを意識した展開の仕方は工夫次第です。指導と評価が一体となり、授業改善を進めつつ、評価を通して児童生徒が学ぶことへの自信を持つことができれば、生涯にわたる学ぶ意欲への原動力につながるものと確信しています。

引用・参考文献

・文部科学省（2020）『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校 外国語』